

## Der gesamte Bericht von Alina(アリーナの報告)

私はアリーナ・マース、コトブスのルードヴィッヒ・ライヒハート・ギムナジウムの 10 年生です。交換留学で、私は 2011 年 2 月 4 日から、東京の隣の埼玉県で半年過ごすことになっていました。

11 時間のフライトのあと、2 月 5 日の朝私は東京の成田空港に到着しました。私はとてもわくわくしていました。これが私の初めての一人旅だったからです。まず私は、これから半年間お世話になるはずの家族に会いに行きました。空港のロビーではすでにホストファミリーと、大宮高校の長田先生が私を待っていてくれました。私と一緒に学校に行くことになるのは、りょうという男の子です。みんな私のことを心から歓迎し、私の荷物を運んで、またいろいろなことを説明してくれました。家に向かう途中で、おばあさん、おじさん、おばさんといとこのお家に寄り、私のことを紹介してくれました。

続く一ヶ月はたくさんの経験でいっぱいでした。ディズニーランドに連れて行ってもらったり、学校の友人と原宿でお買い物をしたり。たまにホームシックになることもありましたが、ホストファミリーの優しさに元気づけられていました。彼らは私を、家族の一員のように受け入れてくれたのです。

日本のお家はドイツと比べるとかなり小さいのですが、私は 10 平方メートルほどの一人部屋をもらいました。毎日学校から帰ると、私たちは炬燵に座ってお菓子を食べながらコーヒーを飲みました。

お母さんは毎朝 4 時に起き、学校に持っていくためのお弁当と朝ごはんの用意をしてくれます。私たちは 6 時に起きます。学校は 8 時 40 分からののですが、ここは学校からは少しだけ遠いのです。

朝は寒いので、コートを着ていくよう言われました。学校の制服はスカートとシャツなので、コートなしでは凍死しかねません。

りょうと私は毎日自転車で駅まで行き、1 時間ぐらい電車に乗って学校まで行きます。朝も夕方も、駅のホームや電車の中は人でいっぱいです。車両に入りきらないくらい人が多いので、ドアも閉まらないくらいです。いまにも迷子になってしまいそうですが、私の場合いつもりょうが気にかけてくれたので平気でした(さもないとどこに行ってしまうかわかりませんから)。

ホストファミリーからは多くのことを学び、ともに多くのことを経験しました。私は心から彼らに感謝しています。

2011年3月11日、金曜日

しんどいテスト週間も終わり、私たちは週末が来たことを喜んでいました。いつものように授業のあと部活動が始まりました。りょうと私は陸上部です。

学校の裏の校庭で、私たち部員はストレッチをしながら、テストの愚痴を言い合い、週末の予定などについてお喋りをしていました。14時50分頃、地面がいきなり揺れだしました。道路に止められた車、街灯、周りにあるものすべてがぐらぐらと揺れていました。先生が木から離れた方がいいと言って私たちを呼び集めました。みんなすっかりあわて取り乱し、揺られてがたがたと鳴っている建物をじっと見つめていました。校庭でしっかりと抱き合いながら。

悪天候か何かのように、地震は日本ではある意味日常的なものです。しかしこんなに激しい地震はめったに起こりません。2分ほどですべて過ぎ去りましたが、私には延々と長く感じられました。お盆に乗せられて揺られている気分。怪我などはないのに、足がぐらついていました。建物は地震が起きても平気なようにつくられているそうですが、大丈夫でしょうか…

続いて小さな地震が何度か起こりましたが、最初のものほど大きくはありませんでした。

家に帰ろうと駅に行ったところ、電車が全く動いていないことを知りました。駅員がまだ車内に残っていた人を道路に降ろしていました。案内板のところには、早く帰りたいと思っている百人もの人がいました。この辺りでは電車が主要な交通機関なのです。

りょうが誰かに迎えに来てもらおうと、連絡を取ろうとしましたが、駄目でした。電話回線はすっかり混雑していたのです。何をしたらいいのかわかりませんでした。更に悪いことに気温も下がり、風が強くなってきました。凍りついてしまいそうだったので、私たちは駅のインフォメーションセンターで待っていました。そのうちに今日はもう電車が動かないというので、私たちは学校まで戻らなければなりません。学校に着くと、りょうは職員室の電話でもう一度連絡を取ろうとしました。その間、私はテレビでニュースを見ていました。津波の映像でした。船や家、車が破損し、どんどん押し流されていました。とてもショックでした。こんなにひどいものだったなんて…ドイツでもすでにこのニュースが放映されたらしく、一人の先生が私のところに来て、ドイツで心配しているだろうと言いました。私も両親に電話をしようとしたのですが、やはり繋がりません。りょうも誰にも連絡が取れませんでした。

ほかの多くのクラスメートたちと一緒に、教室で待つことになりました。りょうは、今後もし誰とも連絡が取れなかったら学校に泊まることになるかもしれない、と言いました。そうこうしているうちに夜の7時になりました。いつもなら簡単に家に帰って寝られるのに。大声で泣きたいくらいでした。ほかの生徒たちはあまり不安がっていない様子でした。売店で飲み物やお菓子を買って、トランプで遊んだり、くつろいで漫画を読んだりしていま

した。どんどん時間が経過していきます。学校からもクッキーと毛布が支給されました。

30 回も試して、やっとりょうはお父さんと連絡が取れました。迎えに来てくれるそうですが、道が混んでいるためすぐには来られないだろうとのことでした。私もついに両親と電話が繋がり、地震があったこと、自分は無事であることを伝えました。涙が止まりませんでした。

4 時間後、やっとりょうのお父さんたちが学校に到着しました。真夜中の 1 時頃、私たちは家に着きました。しかしすぐに寝ることはできませんでした。地震は何度も起こるし、ドイツから父がまた電話をかけてきたからです。父はドイツに帰ってくるよう言いました。というのは、福島県の原子力発電所の冷却システムが壊れ、健康に被害が及ぶ可能性があるからです。父は土曜日のチケットを予約しようと言いましたが、それはあまりに急すぎます。それではホストファミリーにお別れを言うこともできません。話し合っ、日曜日に帰ることになりました。こんなに早く帰るなんて…一ヶ月半一緒に過ごしてきた家族に、何か心からしてあげられたことがあったのでしょうか。

日本で学んだ拙い日本語で、私はドイツに帰らなければならないことを説明しました。3 時ごろ、ようやく眠ることができました。

2011 年 3 月 12 日、土曜日

朝早く、私は父からの電話で目を覚ましました。電話で父は福島がどんどん深刻になってきていると言っていました。さて、私はできるだけ急いでドイツに帰る準備をしなくてはなりません。いろいろと大変でした。まず、半年前日本に留学していたドイツのクラスメートのビビエンに電話をし、彼女からりょう達にいろいろ説明してもらいました。こんなにすぐに帰らなければならないことをなかなか分かってもらえませんでした。メディアの混乱を見たら、私が帰らなければならないことも納得できるでしょう。テレビでは津波や原発の映像が流れていますが、はっきりとした影響は分かりません。

長田先生が電話で、電車が動いていないし、高速道路も封鎖されているので、空港には行けないかもしれないと教えてくれました。何度も電話して説得して、ようやく話がまとまりました。成田まで行くにはかなりの時間がかかると計算し、目覚ましをセットしました。

2011 年 3 月 13 日、日曜日

5 時に目覚まし時計が鳴りました。急いで着替え、下でホストファミリーとの最後の朝食をとりました。こんなに早くお別れしなくてはいけないなんて、あまりに残念です。みんなが、この惨事が過ぎ去ったときには、いつでも戻ってきていいと言ってくれました。お

母さんが、私がいつも食べていたお菓子を一パックくれました。

6時ごろ、みんなで駅に向かいました。電車はまばらながらも動いていました。ここで父さんとお別れしなくてはなりませんでした。りょうとお母さんはもう少し付き添ってくれるのです。何回か乗り換え、2時間ほどで東京の駅に着き、そこで長田先生と落ち合いました。

ここでお母さんともお別れしなくてはなりません。お母さんは泣きながら、私をもう一度抱きしめてくれました。私はここを離れて行ってしまうことを、このときとても悪いことのように感じました。みんなもドイツまで連れて行くべきでは？それとも私が日本に留まるべきでは？

特急電車に乗って成田空港まで着いた頃には、もう9時でした。手荷物預かり所に向かう途中には、段ボールを敷いてその上で寝ている人がいました。飛行機が出ていないようなところに行く場合、帰ることもできないからです。

チケット売り場などのあるフロアはたいへん混み合っていました。みんなが忙しく動き回っていて、私の番になったのは1時間も後でした。またりょうと私がお喋りしているときにも地震が起き、掲示板などが揺れていました。

予約した飛行機がちゃんと出るか不安でしたが、何事もないようなので安心しました。荷物を預けたあとまだ時間があったので、昼食をとり、写真を撮ったりしました。

りょうは一緒に行きたいと言ってくれました。私も、一緒に行きたかったです。出国審査の時間になり、わたしはりょうと長田先生とお別れしました。彼らにどんなに感謝しているかは言い表せません。彼らなしではドイツまで帰れないような気持でした。

飛行機が定刻通り動いていてよかったです。席に着いたところでやっと緊張感が抜けました。とにかく、万事うまく行ってよかったです。